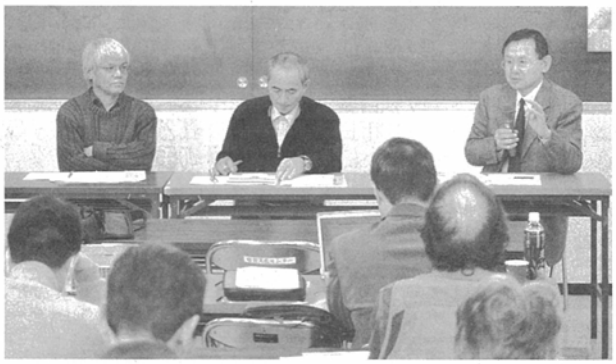
美　新　聞　【第3種郵便物認可】

災害多発 文化資料の保全必要

情報処理学会発表会 研究者講話・ディスカッション

群島全体での「奄美遺産」提案

情報処理学会「第93回人文科学とコンピュータ研究発表会」（同会主催）が27日から3日間の日程で実施され、28日は「歴史文化遺産とその情報資源化」と題した企画セッションを奄美市の奄美文化センターで開いた。奄美の歴史・文化研究者による講話やパネルディスカッションがあり、奄美遺産（島の宝となる地域文化・歴史）の保全・活用のあり方を探った。



講話した石上氏、中山氏、弓削氏＝写真右から＝

文科省文化審議会委員の石上英一氏と、奄美文化財保護対策連絡協議会長の中山清美氏（奄美博物館長）、奄美市文化財保護審議会長の弓削政己氏の3人が講話。主催側と、共催した奄美郷土研究会の会員ら約50人が参加した。

石上氏は「南島文化において奄美群島が大変重要な地域であることが、最近の考古学の分野でも明らかにされている」と述べ、本土と琉球の文化が融合し、新しい文化が形成された上での奄美の地理的価値など強調した。

一方で奄美・沖縄近海は地震が多く、過去に喜界島沖で起きたマグニチュード8の大地震や、台風など災害の多い地域であることを指摘。「奄美にある豊かな資料をどのように伝え、保全していくかが大きな課題」として、奄美市、伊仙町、宇検村の3市町村が共同で行う「奄美遺産」の取組みを、12市町村が手を結び、群島全体で進めていくことを提案した。

中山氏は、2010年の豪雨災害後に行った災害ゴミなどに紛れ、貴重な文化財を損失させないための文化財レスキューの活動を紹介。各市町村でのレスキュー体制の確立や、隊の編成など、中山氏が考える文化財レスキューのあり方も説明した。

また、奄美市笠利町赤木名地区における文化的景観事業の取組みなども紹介。中山氏は「各集落でシマの宝を守り、伝え、それを観光や教科書（教育）、研究、街づくりに活かしていくには、地域の人達の理解が必要。奄美遺産の取組みを具体的に進めていくのは市民の皆さん」とも話した。

弓削氏は、10年と11年に発生した豪雨災害による、奄美アイランド原野農芸博物館と龍郷町中央公民館での歴史資料の損傷や、1986年に徳之島町手々で発生したフロの家の火災により焼損した資料など、事例をあげ、災害と資料保存について説明。

また、「奄美の歴史史料は、琉球王国統治下の史料としての側面と、島津氏侵攻後（1609年）、琉球王国として独自国家であった島民に対し、薩摩的（近世的）な支配統治がどのようになされていったのかを明らかにする史料としての、2つの側面がある」と、奄美歴史史料の貴重性を強調した。

登壇した3氏をパネラーに迎えたパネルディスカッションでは、奄美遺産の地域振興と研究の資源としての活用法など、会場も交えて意見交換した。